を焚いた。

蛸薬師の祭り　鬼神谷では七月七日を「薬師さんの祭り」と呼び、疣取りに御利益のある「蛸薬師」の縁日とする。昭和十五年ごろまでは薬師祭りには親戚を招待して、砂糖餅（あんころ餅）を搗いて出した。鬼神谷の蛸薬師は古来、「疣を取ってくれたら、蛸の絵を書いて来ますから」と薬師如来に祈願すれば、かならず疣が取れると信じられてきた。薬師堂内には祈願成就の御礼に奉納された蛸の絵が、幾枚も貼られている。

目の薬師の縁日　七月十二日は、東町の興長寺に安置される薬師如来の縁日である。この薬師はもとは海に近い「イモゴ谷」の中央部にまつられていた。薬師堂の付近から清水が湧き出ていて、この水で目を洗うと眼病が平癒すると伝えられ、近在から多くの人々が参詣した。その後、薬師堂は現在地に移転されたが、眼病平癒祈願をする参詣者は跡を絶たず、薬師如来に供えた水やお茶で目を洗う習俗が残存していた。

七月のその他の行事　四十八夜念仏　金原では昭和十年ごろまで、七月一日から八月十八日まで毎夜、青年団が中心になって観音堂に集合し、四十八夜念仏を唱えた。特に、七月二十四日を「中回向」といい、御馳走を作って食べた。

観音さんの縁日　二連原では七月十七日に地区の人々が会館に集合し、観音像に御詠歌をあげた。

妙見さんの縁日　七月十八日になると毎年、東町の龍海寺境内に祭祀される「妙見さん（社）」へお参りをした。

虫送り　床瀬では、稲に虫がつくころ、二、三人が組んで虫送りをする。石油かんなどをたたき、竹ボラをならし「ぬか虫送った、丹後の方へ行け行け」と田のまわりをまわる（『兵庫探検（民俗編）』より引用）。

焼祈禱の行事　草飼は大正九年七月二十一日に大火があり、区の半分の家々が焼失したという。それ以後、その日を祈禱日と定め、午後氏神の境内に区の全戸が集まり、社殿の周囲を「払え給え清め給へトーカミエミダミカコンリコンミコンダケン」と唱えながら回り、一周するたびに竹串を一本神前に供えた。各自に配付された竹串がすべてなくなったとき、次は不動尊の所へ行って同様に「お千度」をした。不動尊の周囲を巡るときは、行者講の唱詞と一緒の「ノーマクサアマンダー」といった（花房喜代次著『遠くなつた草飼の生活』参照）。

第四節　盆行事（八月行事）

(1) 盆の準備

釜蓋朔日　旧暦七月一日の異名で、地獄の釜の蓋が開く日といい、盆の始まりの日とされる。中村・森本・和田では八月一日に、小麦粉を水で練ってソラ豆や小豆の餡を入れて包み、たてり（ミョウガ）の葉で巻いて、鍋に油を引き二、三個並べて焼いて食べた。この団子は「鍋焼き」とか「スリ焼き」とかよばれ、森本・中村では昭和二十年ごろまで、一方の和田では明治時代末期まで作られていたという。

七日盆　**墓掃除**　全国的に見られる習俗であるが、竹野町でも八月七日に墓掃除や仏壇の掃除をする家が多い。しかし、近年では同月一日・五日・十日・十一日など、都合の良い日に墓掃除をする家が増えてきた。

〔桑野本〕八月七日は「仏さんがきなる日」といって、墓を掃除した。この日に仏壇に置いてあった仏器を、すべて川辺に持って行き焼却した。〔須谷〕埋め墓の埋葬の仕方は、死者が出ると墓地の端から順番に掘り返

し死体を埋め、埋葬する場所がなくなったときは、墓と墓の間を掘って死体を埋める。たとえば、墓の間に次の人が埋められると、それまで埋葬されていた人の墓はなくなったと考えて、縁者はこのときを境に以前埋められていた場所の墓掃除を止めることになっている。埋め墓の殯は、三年目の命日に取り除き、焼却することになっている。〔西町〕墓掃除をするときに、乾燥した稲苗をタワシの代わりに使用して、墓の輪頭部を磨いた。これは、田植え時の残り苗を洗い天日で干し、保管して置いたものである。〔田久日〕墓掃除や道の掃除をした。夜はシバイドコで、「江戸七郎踊り」・「道念」・「阿波十郎兵衛」・「江州音頭」等の盆踊りの稽古をした（『但馬海岸』より引用）。

寺施餓鬼　下村は日高町の大円寺と出石町の福成寺の檀家であり、三原も大円寺に属している。七日に大円寺で寺施餓鬼が行なわれるので、各戸が参加する。坊岡の満願寺の寺施餓鬼は、八月十日である。

棚経　以前は草飼では、寺の住職が各家を訪れ「棚経」を唱えたが、現在では十三日に回るようになった。また、第二次世界大戦前は、竹野の子供たちは棚経の日が楽しみであった。僧侶が棚経に各戸を回るとき、子供たちは団扇で背を仰ぎながら、付いて回った。訪れた先々で子供たちは、素麺や瓜を御馳走になった。

七夕　中国伝来の貴族文化としての七夕に対して、民間では七日に盆行事の一環として七夕行事を行ない、作物の豊作を願ったのである。

〔床瀬〕大正時代末期までは、縁側に竹を二本立てて横にオガラを渡し、ホウズキや豆を掛けた。この前に机を出し、ナスやキュウリなどを供えた。七夕さんを見に来た子供たちに、お菓子を手渡した。〔小丸〕縁側に竹を立て、ホウズキやササゲ豆を吊り下げた。これを「七夕さん」と呼んだ。〔宇日〕竹を二本門の前に立てて、神

カザリなどをした（『但馬海岸』より引用）。

〔竹野〕昭和四十年ごろまでは八月六日に、七夕さん（図30）を家の縁側近くに飾った。二メートルくらいの竹を二本立て、もう一本の竹を横に渡し、束ねた素麺やインゲン豆・ホウズキ・七夕用の菊型ラクガン（干菓子）を掛けた。色紙で短冊や星型・提灯型などを作って、コヨリをつけ竹に吊り下げた。その前に台を置いて、ナス・トマト・瓜・果物・カボチャなどを皿に盛って、七夕さんに供えた。八月七日の夕方に、七夕さんを川に流した。一方、姫路地方に多く見られる七夕飾り（図31）が、竹

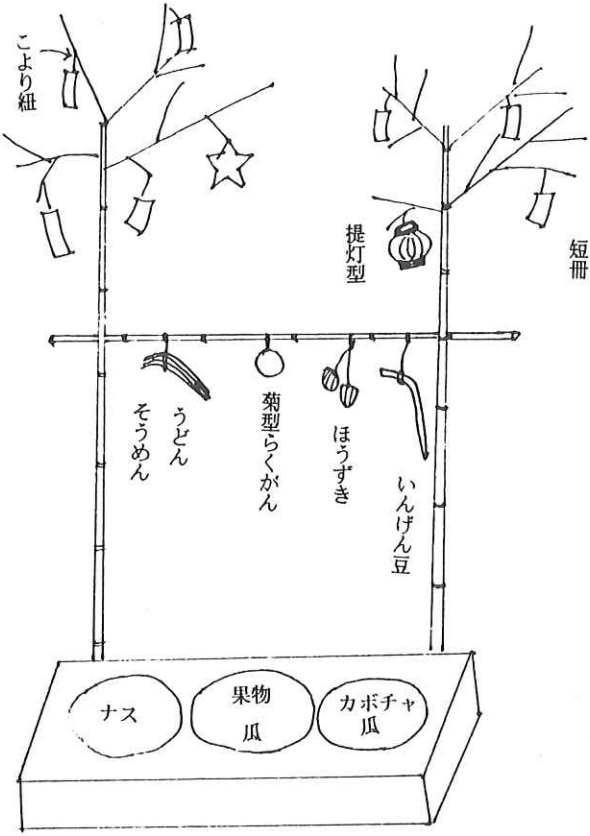


図30　竹野の七夕行事

野にも分布していたことが、今回の民俗調査で明らかになった。まず、枝の付いた竹を二本立てて、これらに垂直になるように二本の竹を平行に渡した。竹の枝には、五色の短冊を付けた。上段の竹には色紙で作った五つのヒトガタ（人形）を通し、下段の竹にはホウズキ・七夕の菓子（菊型の干菓子）・素麺などを掛けた。ヒトガタを吊りさげる点が、播州一帯に分布する七夕行事によく見受けられるところである。災いをなす悪霊をヒトガタに依り付かせて川へ神送りをし、一年間の健康や家内安全・五穀豊穣などを願うのが、本来の七夕行事の目的である。

この七夕飾りの前方部に祭壇を作り、ナス・キュウリ・トマト・団子・馬形などを供えた。馬形とは、折った割り箸を四本ナ

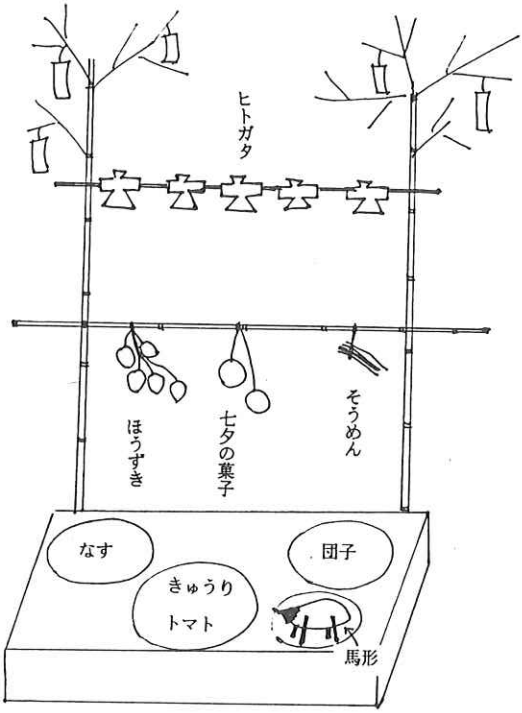


図31　竹野の七夕行事

スに突き挿して、馬の足としたものである。これに乗って七夕さんがやってくると信じられていた。七夕さんを祭った祭壇の竹や供物を川へ流すときは、「来年もきなれや、さらい年もきなれや」と言った。その後で「わしとおまえは七夕の縁よ、雨が三粒降ったら、年に一度逢いかねる」と歌った。このように七夕の馬形は仏送りの馬形（仏送りの項を参照のこと）と同一の宗教的要因を含むもので、常世と現世を結ぶ「神」や「霊」の乗り物と考えられたのである。

七施餓鬼　須谷の初盆の家々は、八月七日夜から十三日夜まで七日夜連続して、寺へ参詣する。これを「七施餓鬼」という。

盆花採り　十日から十三日の間に、畑・野原・山などへ行って、女郎花・団子花・盆花（白い花）など、仏壇や墓に供える花を採って来た。これらを「盆花」と呼んだが、最近は、小菊・百日草などの花を買うようになった。

(2) 盆（魂祭り）・八月十三日

民間の盆行事は室町時代以後、中国伝来の盂蘭盆会と結合して、仏教色が濃厚になった。しかし、その背後にはわが国の民間信仰に基づく精霊を迎え、祭り、送るという魂祭りの痕跡を種々の形で含んでいる。盆に人間界を訪れる新精霊や祖霊を祭祀するために、様々な形態をした盆棚飾りが設置されるが、竹野地方では新仏を祀るための初盆飾りとして「アラジョ棚」や「床飾り」がなされ、無縁仏のためには「施餓鬼棚」が作られる。この地方の一般的な盆飾りは、オガラや竹を仏壇の前方に渡し、供物を掛ける形態と、仏壇の前に葉や皿・盆などの上に供物を盛る形態の二種である。

盆棚飾り

アラジョ棚　小丸・芦谷・須谷では、「アラジョ棚」「オラジョ棚」と称する盆棚（写158）を家の縁側近くに設置し、新精霊を祭祀する。須谷の福丸氏の伝承によれば、八月十二日に初盆の家はアラジョ棚を作り、同月の十五日の午前中まで新仏の霊を祭祀するという。約二・五メートルの青竹を四角に立て、オガラを渡して棚を作る。以前はこの棚に、七段のオガラの梯子を立てかけたが、現在ではオガラの代わりに青竹を材料にして、梯子を作る。アラジョ棚には、戒名を書いた白木の位牌と、盛り飯・野菜・果物などを供える。盛り飯に、紫・赤・青・黄色の幡を三本立てる。アラジョ棚の前に、水が入った鉢と一枝の榊を置く。この枝に水を付けて、アラジョ棚の位牌にかけ、新精霊を弔う。この行為は水を位牌にかけて、新精霊の穢れを清めようとするものである。十三日に、寺の住職が訪れ、先祖の位牌をまつってある仏壇と、新仏の位牌をまつってある棚の前で、お経を唱える。アラジョ棚に安置された位牌は、死亡時に作られたもので、八月十五日の仏送りのときに、須谷の入り口部分にある地蔵尊の所へ、アラジョ棚と一緒に持って行くことになっている。

初盆の床飾り　羽入の初盆の家では、床の間に新仏に供えられた様々な供物、特に盆提灯が所狭しと飾られる。浜須井でも、初盆の家では多数の提灯を飾る。

写158　須谷アラジョ棚

施餓鬼棚

〔草飼〕八月十三日に施餓鬼棚を、家の縁側近くに作った。まず、三センチメートル角の棒を四本用意し、これを四角柱として地に刺し、地面から四〇センチメートルほど上がった所に、約五〇センチメートル角の板を固定した。さらに、その板より約七〇センチメートル上がった場所に、もう一枚の角板を設置した。次に、枝の付いた竹を四本、棚の四隅に固定し、竹製の八段の梯子を棚の正面に掛けた。梯子は縁側に向くように設置された。施餓鬼棚の上部の棚には「三界万霊」の位牌が置かれ、下段には自然石を重しのために一個置いた。重し用の石の前方に、水が入った鉢が一個置かれ、この水は上段にまつられた位牌にかけられた。施餓鬼棚は十五日に壊した。〔田久日〕昭和四十年ごろまでは玄関の脇の部分に、「シャラダナ（精霊棚）」を設置した。シャラダナは笹竹を四方に立て、オガラを並べて板状にした棚を竹の先端部に取りつけたものであった。高さ一・八メートルの笹竹二本

図32　草飼の施餓鬼棚

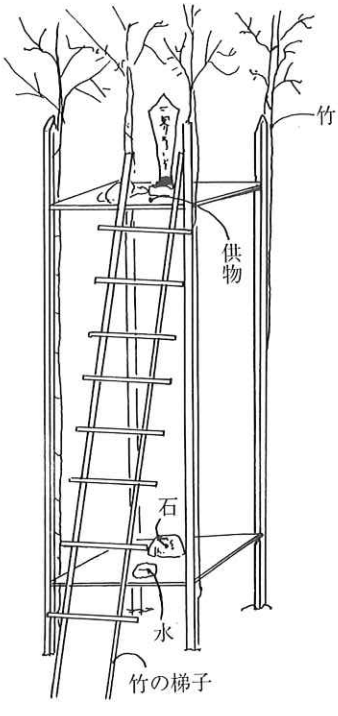


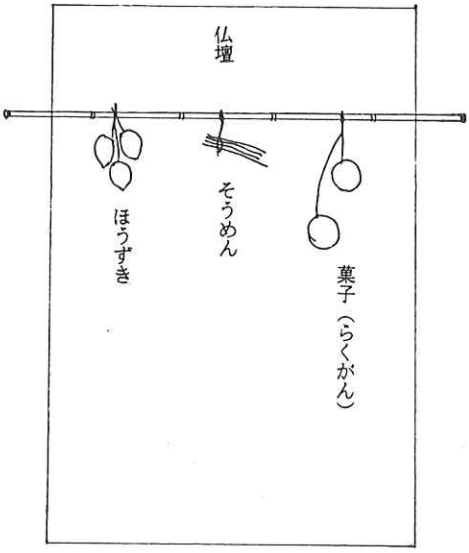
図33　切浜の施餓鬼棚

に、幅約三五センチメートルのオガラを渡して梯子を作り、この棚に立て掛けた。シャラダナには、柏や桐の葉に盛った団子・トコロテン・キュウリ・ナスなどを供えた。〔切浜〕八月十三日に、家の縁側近くに施餓鬼棚を設置して、無縁仏の弔いをする。この地の施餓鬼棚は木製で、長方形の木箱の四角に足を四本打ち付けたものである。柏の葉に団子を三、四個乗せて棚の上に置き、餓鬼の供物とする。

仏壇飾り

オガラ・竹に供物を掛ける形態　〔金原〕仏壇にオガラを一本横に渡して、「仏さんのオイソ」といってササゲ豆を吊り下げる。ホウズキも吊り下げる。柏や里芋の葉の上に、ナスや瓜を乗せて供える。家によっては、仏壇の前に竹を渡し、ササゲ豆やサンショウを掛けることもあった。〔小丸〕仏壇の前方部に、ササゲ豆を吊り下げた。約一〇センチメートルに折ったオガラをナスビに四本突き挿して、馬形の足を作った。これを「馬」と呼んだ。馬形を仏壇の前に供え、「仏さんの乗り物」といった。また仏壇の前にオガラを渡し、ホウズキや菓子を吊り下げた。〔阿金谷〕昭和五十八年ごろまでは、仏壇にオガラを渡して、柿や梨・ホウズキなどを掛けて、盆飾りをした。

図34　竹野の仏壇飾り



〔羽入〕昭和初期まではオガラを仏壇に渡し、ホウズキや豆などを吊るした。〔田久日〕仏壇の前にオガラを渡し、ホウズキ・団子・豆・菓子などを吊るした。〔竹野〕昭和六十三年も、仏壇の前に細い竹を一本渡し、菓子・素麺・ホウズキなどをかけた。〔浜須井〕昭和二十年ごろまでは仏壇の前方に、オガラを一本横に渡し、ホウズキ・色紙製の花形・団子などに糸を通して、吊り下げた。

糸に供物を掛ける形態　〔松本〕昭和三十年ごろまでは仏壇の前に、ホウズキを糸でくくって吊るしたり、長いインゲン豆をそのまま仏壇の戸に掛けたりして、盆飾りをした。〔宇日〕昭和四十五年ごろまでは、仏壇の前に栗やホウズキなどを掛けた。

葉・皿・盆などに供物を盛る形態　十三日になると、盆花やホウズキを花立てに立て、仏壇に飾る。仏壇の前に団子（黄粉・小豆）・砂糖餅・素麺・トコロテン・野菜・果物などを、柏・蓮・桐・里芋などの葉や、盆・皿の上に盛って供える。

墓参り　十三日の夕方から夜にかけて、各家々はナスやキュウリを微塵切りにした「ミズノミ」、あるいは米・団子・花・線香・ロウソク・灯籠などを持って墓参りをする。墓に水も供える。墓地に生えている木の枝などに灯籠を吊るし、十三日から十五日まで毎夜、灯籠に火を入れる。

迎え火　〔門谷・河内・草飼〕十三日の夕方に、オガラを持って墓地へ行き、迎え火を焚く。〔林〕夕方、各家の前で、迎え火を焚いた。〔羽入〕墓地の石塔のところに、長さ十センチメートルくらいのオガラの束を立てて、火を付けた。これを、「迎え火」と呼んだ。

仏迎え

〔芦谷〕安谷家が所蔵する『安谷家伝記　行事習慣篇　第貳』の仏迎えの項に、石川県に分布するアエノコと呼ばれる正月行事にひじょうに類似した仏迎えが、昭和四十七年ごろも、安谷家で行なわれている様子が、克明に記されている。この記録より正月行事や盆行事は、常世から子孫の家々を来訪する祖先（新精霊・祖霊・祖霊神）を各家が迎え、丁重に祭祀して五穀豊穣や家内安全を願い、ある期間が経過するとまた丁重に祖先を祀って常世に送り帰すことを目的として行なわれる祖霊祭、あるいは死者供養の宗教的行事と考えられる。一方、橋まで仏を迎えに行く行為は、霊が集まる場所の一つが橋である、と信じられていたことによる。このような理由で、『安谷家伝記　行事習慣篇　第貳』は、仏迎えの行事を理解するうえで、たいへん貴重な資料とおもわれる。よって、左記のごとく該当箇所を、同書より引用記載した。

一、八月十三日　仏迎エ　家カ全部祭タトキニ暮方仏迎エト云フコトヲスルカ、子供テモ大人テモオ線香ニ火ヲ付ケテ鐘（鉦）ヲ叩キナカラトント場ノ上ノ橋マテ行き、線香ヲ橋ノ上ニ供エテ改メテ鐘（鉦）ヲ叩イテ帰ル。ソシテ帰ッタラオ仏壇ニ線香ヲ立テル。オ風呂カ湧イテイタラ線香ニ火ヲ付ケ、ソレヲ持ッテ風呂場ニ行き、又持ッテ仏壇ノ香炉ニ立テル。

コレヲ仏迎エト湯殿案内ト云フ。

〔小丸・浜須井〕墓参りをした後で、縁側に吊るした灯籠に火を入れる。これを、「仏迎え」という。〔羽入〕墓に参って、「仏さんを連れてかえる」という。

ネラミサバ

門谷では十三日の夕食に、「親の有るものにすえる」といって、塩鯖を焼いて桐の葉の上に乗せて食卓に出す。以前は、若嫁が初めて盆に里帰りをするときに、塩鯖を二本手土産として持

たせた。家によっては十四日の朝食のおりに、二匹のサシ鯖を焼いて膳に付け、両親が揃っている子がこれを睨んでから、食べるという。

(3) 盆・八月十四日

墓参り　八月十四日には朝早く家族が揃って、ミズノミ・米・菓子・団子・トコロテンなどを持って、墓に参る。これらを蓮・柏・里芋・桐の葉に盛って墓に供え、墓石に水をかける。樒・女郎花・団子花・サイライバナなどの盆花を、竹筒に入れる。ナスとキュウリは、家によって微塵切りにする場合と、半月切りにする場合とある。線香も墓に供える。

〔三原〕墓参りは、詣り墓と埋め墓の両方に参る。大根・キュウリ・ナスを切って、米や団子と混ぜて、里芋の葉の上に盛り、墓に供える。盆花は女郎花などの色花を供える。いうまでもないが、三原・須谷・阿金谷は両墓制である。〔御又〕午前四時ごろに女性ばかりが、御又全戸の墓に参り、キュウリとナスを微塵切りにした「ミズノミ」を柏の葉に盛って供える。

初盆参り　〔下村〕八月十四日に「初盆参り」といって、初盆の家へ親戚がお供え品を持って行った。この日に、初盆の家は親戚に簡単な御馳走をした。昭和十八年ごろから、初盆の家の仏壇に参ることを中止した。そのかわりに、新仏の墓に参るようになった。〔須谷〕午前七時ごろに村中が、初盆の家のアラジョ棚に参る。野外から縁側を向いて、棚に参る。

〔松本〕新仏の親戚は、その家に御詠歌をあげに行く。夕方になると、墓にロウソクを立てに行く。

盆踊り

竹野地方全域で、八月十三日から十六日にかけて、盆踊りが踊られる。特に河内では、初盆の家は十四日の夜に墓でオガラを焚き、その後で新仏の位牌がよく見えるように戸を開けておき、家の庭で供養の盆踊りが踊られるのに備えたという（「盆踊り」の項を参照のこと）。

新精霊送り

須谷では十五日の午後から、円通寺で寺施餓鬼が修せられる。その後で初盆の家はアラジョ棚を取り壊し、須谷の下の地蔵尊のところへ仏送りをし、ここでアラジョ棚を焼却する。仏送りの後で、新しく作った位牌を仏壇の中に安置する。

六斎念仏

〔金原〕八月十四日には、念仏を唱えて村の全戸を回った。新仏の家の庭先で念仏を二回唱えた。すると、その家からお布施が出たので、その金で御馳走を作って食べた。〔阿金谷〕八月十四日に青年たちは、念仏鉦を手に持って各家を巡り、庭先で立ったままで念仏を申した。初盆の家では座敷に上がり、「ナムアミダブツ　ナムアミダブツ」と詠唱した。これを、「念仏申し」といった。詠唱念仏が終了すると、初盆の家から念仏衆へ御馳走が振る舞われた。この日は村の堂でも、座って念仏を唱えた。念仏鉦と撞木は、区長が保管している。

その他の行事

以前は、田久日浜で鯨の供養をした。両界院の住職が浜施餓鬼をする。

(4) 盆・八月十五日、十六日

村施餓鬼

宇日では十五日に、地区全戸が集合して、村施餓鬼をする。このとき、初盆の家は鉢に御飯を山盛りにして、会場まで持参することになっている。

仏送り

竹野地方の山間部や平野部においては、八月十五日か十六日の早朝、あるいは夕方に川へ仏送りをするのが、一般的である。川の水際に細長い石を立てて石塚状のものを作り、その前に団子や瓜・ブドウ・キュウリ・ナス・スイカ・桃・花・線香などを供える。この地方では水際の石塚を「石地蔵」「仏さん」「石塔」などと呼称し、この前で念仏鉦に合わせて念仏や御詠歌を詠唱して、仏送りをする。この習俗を「川施餓鬼」とも呼ぶ。この形態の仏送り以外に、以前は麦藁舟を川に流す仏送りも存在した。

一方、海岸部においては、波打ち際に石を立てて、ここに盆の供物を置いて仏送りをする。以前は、大型の精霊舟を作って海に流して仏送りをしたが、現在は公害の問題から、この習俗は廃絶した。

川へ仏を送る形態　〔床瀬〕十六日の早朝に、川の岩の上に盆の間に供えた品々と、新しく作った団子を置き、仏送りをする。このときお茶を供え、般若心経を唱える。〔下村〕朝、川の辺に石を立て、ミズノミ・おにぎりを柏の葉のうえに、団子・素麺・トマト・ナスなどをズイキ芋の葉に乗せて供える。石塚を「石地蔵」という。〔二連原〕十五日の朝、川の橋のところに仏を送った。現在は十五日の夕方に、川辺に石を立てて、この前に供物を置き、鉦を叩いて念仏を唱えながら、仏送りをした。〔桑野本〕「アマス」といって、川原に石を立てて、盆の間の供物を置き、お茶・花などを供えた。〔河内〕早朝、川へ仏送りをする。水辺に石塚を立てて、その前に平たい石を一つ置いて、仏壇に供えてあったものをすべて置く。〔御又〕十五日に川へ仏送りをする。「地蔵さん」と呼び、川原に石を立てる。この地蔵さんの前に、小豆御飯二個と野菜・果物を供える。これを、「仏送り」という。〔林〕川原に石を積み、仏送りの祭場を作る。六つの石を立てたものを「六体地蔵さん」といい、その後方に石を灯籠形に積んだものを一対置いた。この前に供物を置いて、仏送りをした。〔鬼神谷〕

昭和三十年ごろまでは、麦藁舟を作っていろいろな供物を乗せて流した。〔小丸〕十五日の朝に、仏送りをする（写163）。昭和五十二年ごろまでは長さ五五センチメートルくらいの藁舟を作り、帆を立てて、この舟に供物を乗せて、念仏を唱えながら流した。川に止まっている舟を見つけたときは、子供たちが水に入って流した。〔和田〕十五日を「サライ盆」と呼び、花や線香を持って墓に参り、その後で、仏壇に供えた品々を大川へ流した。これを、「仏送り」といった。〔阿金谷〕藁で舟をこしらえて、団子や花を乗せて流した。

〔羽入〕昭和三十年ごろまでは、初盆の家のみ長さ約一メートルの麦藁舟を、そのほかの家は長さ約六〇センチメートルの麦藁舟を作り、川へ流し仏送りをした。麦藁舟に施餓鬼幡を立てて、「仏さんの弁当」といって小豆御飯のにぎり飯を二、三個乗せた。舟を流さなくなってから、各家で川辺に細長い石を積んで、その前に盆中の供物を置いた。近年では、村中の人々が一カ所に五、六個の石を立て、地区をあげて仏送りをするようになった（写165）。

〔松本〕十五日の昼間に石を拾って、石塚を立てた。石を積むのは子供の仕事で、大きな石を一つ立て、その周囲に小さい石をその家の仏の教だけ立てた。夕方になると石塚の前に線香や供物を置き、「ナムダイシヘンジョウコンゴウ」と真言を唱え、麦藁で作った長さ約八〇センチメートルの舟に、盆の供物を積んで川へ流した。昭和五十年ごろまではこの習俗であったが、今日では供物は川原で焼却するようになった。〔草飼〕十五日の夕方、川辺に石を立てて「地蔵さん」を作る。この前に供物を置く。以前は皆で供物を交換して食べた。〔浜須井〕昭和三十年ごろまでは、藁舟を作り、十五日の朝に盆の供物を積んで川に流した。藁舟の長さは約五〇センチメートルで、これを流すときに念仏を唱えた。その後、仏送りは十五日の夕方にするようになった。舟を流さなくなってから、川の辺に石地蔵を作り、供物を並べて仏送りをする。

海へ仏を送る形態　〔宇日〕十五日の午後七時半ごろに、「地蔵さん」と呼ぶ石を浜辺に立てる。この前に供物を置き、念仏鉦を叩きながら念仏を唱え、仏送りをする。〔田久日〕夕方に海岸部の岩場に石を積み、この前に桐・里芋・柏・蓮などの葉を敷いて供物を置き、花や線香も供え、仏送りをする（写166）。〔竹野〕昭和五十年ごろまでは、十四日に新藁で精霊舟を作った。十五日の午後三時ごろから夕方にかけて、各家が長さ約一㍍の麦藁舟に、盆の間仏壇に供えたキュウリ・菓子・カボチャなどを乗せて海に流した。初盆の家は長さ約二㍍の麦藁舟を作り、施餓鬼幡とか笹竹を乗せて流した。これらの麦藁舟の帆には「南無阿弥陀仏」と書き、舟の後方に線香を立てた。この舟を西方丸と呼んだ。西方丸を沖まで押して行くのは、子供たちの役目であった。昭和五十五年ごろまで、精霊舟を流す家もあった。〔切浜〕以前は十五日

写161 下塚の仏送り（川辺へ）

写159 森本の仏送り（川辺へ）

写162 轟の仏送り（川辺へ）

写160 坊岡の仏送り（川辺へ）

の夕方に、二組に分かれて精霊舟を流した。昭和四十五年ごろまで村の隣保で集まって、長さ約一メートルの大きな麦藁舟を作った。盆に供えたあらゆる供物をこの舟に積んで、沖まで若者が泳ぎながら押して行った。初盆の家は別に麦藁舟を作り、寺から新仏の戒名を書いた紙を貰い、舟に乗せて流した。麦藁舟の帆に「南無阿弥陀仏」と書いた。その後、一度、板の舟になったが、遠くまで流れないため、中止になった。舟を流さなくなってからは、川が海に流れ込む辺りの砂浜に穴を掘り、ここに供物を埋めるように変化した。そのおりに僧侶に読経して貰い、地区の人々も御詠歌を三十三番あげる。現在は十六日に、施餓鬼棚を全部外して、仏送りをする。

その他に仏を送る形態　〔金原〕十六日の朝、お不動さんの裏に盆の供物をすべて置く。念仏鉦を叩きながら、念仏を唱え、仏送りをする。〔須

写165 羽入の仏送り（土に埋める）

写163 小丸の仏送り（川辺へ）

写166 田久日の仏送り（海岸へ）

写164 阿金谷の仏送り（川辺へ）

谷〕十五日に、盆に供えた供物をすべて、地区の下に位置する地蔵尊の周囲に、持って行く。これが仏送りである。

送り火　〔門谷〕十五日の夕方に、川辺へ仏送りをしたときに、豆ガラを焚く。以前はオガラを焚いたという。この火を「送り火」と呼ぶ。〔羽入〕川に仏送りをした後で、オガラに火を付けて「送り火」を焚いた。〔草飼〕オガラの束を三束作り、墓地でこれを焚いた。これを「盆の送り火」と言った。家によっては、庭先で焚き火をして、この火を「送り火」といって拝んだ。

(5) 数珠繰り・百万遍念仏

竹野地方の各地区に、「百万遍念仏」「数珠繰り」「数珠回し」「仏さんの口開け」などと、俗称される念仏行事が第二次世界大戦まで分布していたことが、今回の民俗調査で明らかになった。いずれの地区の百万遍念仏も、疫病平癒と無病息災を願って始められたものと伝えられる。但馬地方には、いくつかの民俗的念仏行事が、古来より受け継がれてきた。たとえば、養父町では、四十八夜念仏がほとんどの地区にかつては分布していたし、豊岡市では数カ所で六斎念仏が伝承されていた。このように詠唱念仏はそれぞれの地に形を変えて、受入れられていったのである。竹野町の民俗的特色の一つに、百万遍念仏が挙げられる。

一月十六日の事例　〔門谷〕一月十六日を「仏さんの口開けの日」と呼び、昭和十八年ごろまではその年の当番の家に子供や女性が集まり、宿の仏壇の前で百万遍念仏を唱え、大数珠を繰った。大きな玉が回ってくると、頭を下げた。鉦を叩く人を「ドウトリ」と呼んだ。隣村に疫病が流行したおりに、門谷も百万遍念仏を始めたと伝えられ、数珠繰りをすると村内に疫病が流行しないといった。百万遍念仏の後で、宿からお

茶とお菓子が出た。現在でも念仏鉦はあるが、大数珠は所在が不明である。〔林〕明治時代までは一月十六日に、延命山常楽寺の跡にあるお堂で、百万遍念仏を唱えた。村中の人々が集まって、疫病が流行しないように願って、大数珠を回した。

五月八日の事例　〔松本〕第五項　数珠繰りを参照のこと。

一月十六日と八月十六日両日の事例　〔三原〕一月と八月の十六日に老人と子どもが集まり「百万遍の数珠」をまわした後でおやつ（いり豆・あられ）をいただく（谷垣桂蔵著『但馬の民俗中行事（一）』より引用　年）。その後、観音講のときに、大数珠を繰りながら、百万遍念仏を唱えるようになった。〔市場〕以前は一月十六日と八月十六日に、百万遍念仏を唱えながら大数珠を繰った。そのときに祀った観音像を納めた木箱の裏蓋に、「享和□年」と書かれている。享和年間は一八〇一～一八〇三年で、十九世紀初頭のころである。昭和五十五年ごろまでは百万遍念仏のときに、各戸で栽培した粟を持ち寄って粟餅を搗き、出来具合を比べたという。念仏鉦・撞木・大数珠が入った丸袋などは地区内に保管されている（井越武三稿「数珠繰り行事について」竹野町公民館編『万年青』十周年特集号所収　参照）。〔須谷〕一月十六日と八月十六日に「百万遍」という念仏行事をした。ゆっくり一定の節を付けて「ナムアミダブツ」と、高く低く念仏を唱えながら、老人・大人・子供が一緒になって大きな数珠を手で回した。数珠の房は大人の頭を二つ合わせたほどの大きなもので、この房が自分の前に回ってきたとき、額にいただいてすり付けたり、頭に乗せたりした。数珠回しが終わると宿の人や当番の人たちが、一斗鍋に野菜を入れた味噌汁を一杯作った（谷垣ひろ子稿「消えない昔の思い出」『万年青』十周年特集号所収　参照）。〔西町〕以前は、百万遍念仏を唱え、数珠繰り行事をした。この行事の起因は、昔疫病の大流行で多くの犠牲者が

出たため、百万遍念仏を唱えて疫病の流行を防ごうとして、始められたと伝えられている。

八月十六日・盆過ぎの事例　〔大森〕大正時代の初めにお堂（地蔵尊と観音像を安置）が焼失するまで、八月十六日の午後からお堂に村中の人々が集まり、念仏を唱えながら大数珠を回した。大数珠は直径六センチメートルくらいの玉が並び、一つだけ直径約十センチメートルの玉が入っている。数珠を繰る者は円陣を作って座し大数珠を手に持ち、その輪の中心に鉦叩きが座って鉦を叩いた。大きな数珠玉が自分の前に回って来たとき、これを額にいただいた。百万遍念仏を唱えると、疫病が流行しないとか、健康になるとかいわれた。お堂が焼けたときに大数珠も焼失したため、数珠繰りは行なわれなくなった。〔御又〕大正末期までは、盆過ぎに百万遍念仏を唱え大数珠を回した。大数珠の房が自分の前に来たときは、房を額にいただき無病息災を願った。〔二連原〕昭和三十三年ごろまでは八月十六日に子供や大人が地蔵堂に集合して、「ナムアミダブツ　ナムアミダブツ」と唱えつつ大きな数珠を回した。大きな房が自分の前に来ると額にいただいた。百万遍念仏は、村内に疫病が流行しないように願って、始められたと伝えられる。〔小城〕八月十六日に「大数珠繰り」をした。その年の宿に村の人々が集合して、「ナムアミダブツ　ナムアミダブツ」と念仏を唱えながら、大きな数珠を回した。鉦を叩

写167　金原（恵日）百万遍数珠繰り

く人が数珠繰りの輪の中央に座して、大きな念仏鉦を叩きつつ百万遍念仏を唱えた。〔金原〕昭和十年代は一月十六日（後に一月七日に変更）と八月十六日、十二月七日と、年三回百万遍念仏を行なったが、昭和二十年以降は八月十六日の夜のみ大数珠を回すようになった。一月七日を「トキ（斎）」と呼び、十二月七日を「おトキ」といって、御飯を持ってその年の宿へ行き、宿から出る御馳走と一緒に食べた。輪になって「ナムアミダブツ」と唱えつつ大数珠を回す（写167）。念仏の調子は次第に速くなり、「ナンマイダ　ナンマイダ　ナンマイダ」という。最後は光明真言を唱えて、その後数珠を引き合い、数珠繰り行事は終了となる。昔は力を入れて数珠を引き合ったので、たいへんな騒動になったと伝えられる。百万遍念仏が終わると、宿の人は大数珠・念仏鉦などが納められた大箱を次の宿へ渡す。この箱の底には、「文政四年巳二月調立　世話人　金原村　善兵衛」と墨書きされている。文政四年（一八二一）は、江戸時代後期の和年号である。

観世音菩薩縁日の事例

〔桑野本〕第二次世界大戦前までは八月十八日に、村全戸が観音堂に集まって般若心経を唱えながら、大数珠を回した。これを「百万遍念仏」と呼んだ。

地蔵盆の事例

〔神原〕地蔵講の当番は、村の全戸が順番にあたる。その年の当番は、「お迎えをする」といって八月二十三日に前年の当番の家まで、地蔵尊が納められた厨子と大数珠を入れた布袋を受け取りに行く。八月二十四日になると、「地蔵講」とか「念仏講」と呼ばれる百万遍念仏会が、その年の当番の家で婦人会や年寄りの人々によって修せられる。行事内容をみると、まず、講中の人々が当番の家の仏壇に線香を立てることから始まる。年長者が「和尚」と称するリーダーとなって、「ナンマイドー、ナンマイドー（南無阿弥仏）」と唱える。参加者は、これに合わせて大数珠を繰りながら「ナンマイドー、ナンマイドー」と詠

唱する（写169）。自分の前に、大数珠の大型房が回ってくると、大房に向かって頭を垂れて房を額に頂くことになっている。昔から、百万遍念仏が終了した時に、大数珠の房の部分を持っていた人は、将来かならず幸運に恵まれると信じられてきた。百万遍念仏が終了したあとで、会食となる。昔はちらし寿司であったが、現在は茶菓子と果物（ブドウ）がでる。地蔵講のすべての行事次第は、約二時間ぐらいで終了となる（大森恵子稿「但馬地方の地蔵盆と地蔵信仰」『近畿民俗』一一〇号所収より引用）。

〔馬場町〕地蔵盆のときに井戸の前方部で、子供や女性たちが大きな輪を作って、大数珠を反時計回りに回す。数珠の輪の中に、鉦叩きが座る。「ナムアミダンブツ　ナムアミダンブツ」と唱えながら、大きな数珠玉や房が自分のところに来たときは、額を垂れて拝む。念仏鉦は「カン、カン、カンカン、カン　カン、カン、カン、カン、カンカン、カン、カン、カンカン」と叩く。以前は、百万遍念仏を唱えるのに、一時間ほどかかった。百万遍念仏はチビス（疫病）が流行しないように願って、大数珠を回したのが始まりという。調査時には、大数珠は宇川佐右衛門氏宅で保管されていた。大数珠を納めた木箱の表書は「嘉永三年戌歳月日　百万遍数珠入箱　馬場

写168 神原の百万遍念仏

写169 神原の百万遍念仏

町　世話人引用」とある。町内で順番に大数珠を預かることになっている。

疫病流行時

〔竹野〕明治時代末期までは、疫病（百日咳・チビス・コレラ）が地区内に流行したときに、地区の四ツ辻毎で百万遍念仏を唱えながら、大数珠を回した。四ツ辻の近所に住む人々が集まって来て、数珠繰りをした。井戸水から疫病が伝染することもあったので、井戸の前でも、大数珠を繰った。

(6) 盆小屋

田久日では、第二次世界大戦後の混乱期にいつの間にか途絶えていた「盆小屋儀式」と呼ぶ仏迎えの習俗を、昭和六十二年八月十三日に約三十年ぶりに、老人が中心になって復興させた。盆小屋を設置するには、約二時間を要する。盆小屋とは、十三日に海岸近くに木枠を組んで小屋を作り、その周囲を、七、八枚の筵で囲み、地蔵堂から身丈約二〇センチメートルの石地蔵尊を一二体（一年の月数に因んで一二体）運び、小屋の内部に一列に安置したものをいう。盆小屋の大きさは高さ約二メートル、幅約四メートル、奥行き約二メートルの規模である。盆小屋の正面部分は筵一枚分が入り口として開いており、丁度海岸に向かって設置されている。盆小屋の内部に一枚の筵が敷かれ、この上に座って地蔵尊を拝むことになっている。石地蔵には柏の葉の上に団子やキュウリとナスの微塵切りを乗せて供える。線香・ロウソクを立てる。花立てには樒・盆花・団子花・女郎花などの花が入れられる（口絵写真参照）。

本来は、盆小屋の設置から管理まで、すべて小学生を主にする子供たちの仕事であった。かれらは八月二十四日の「送り日」まで、交代で盆小屋の地蔵尊に灯明をあげたり供物を供えたりして、世話をしたと伝えられる。子供たちは世話当番の日は盆小屋の中に板を敷き、この上で遊ぶことが多かった。地蔵盆の日も盆小屋に

子供たちが集合して、地蔵尊の世話をしながら遊んだ。翌二十四日に盆小屋を壊し、「仏を送った」といった。

戦後になって盆小屋は設置されなくなったが、子供たちの手で地蔵尊を海辺へ移動させて、海に向かって安置する習俗は伝承されてきた。日野西眞定氏の説によれば、この習俗は沖合からやって来る祖先の霊をまつる但馬海岸独特の儀式、民間信仰の海上他界に基づくもので、盆帰りの霊の仮住まいとして盆小屋を設置するものであるという（『兵庫探検』（民俗編）『神戸新聞社刊』参照）。

(7)　地蔵盆

竹野地方では八月二十三日の夜から翌二十四日にかけて「地蔵盆」と称し、花や黄粉団子・小豆団子・菓子・線香・ロウソクなどを持って各地区の地蔵堂へ参る習俗が見られる。以前は地蔵尊に供えた団子を、参詣者が交換して食べた（御又・金原）という。初盆の家は地蔵尊にお菓子を供え、死者の供養をするところもある（切浜）。また、地蔵盆には、墓に参ったり（和田・竹野・切浜）、盆踊りを踊ったり（川南谷・桑野本・森本・和田・松本）、万灯を点火したり（「第八項　万灯」を参照のこと）、数珠繰りをしたり（「第五項　数珠繰り・百万遍念仏」を参照のこと）、御詠歌をあげる（切浜）など、地区によって様々な行事が行なわれる。

宇日の地蔵盆と竹野の地蔵盆は、但馬地方の地蔵盆のなかでは珍しい事例である。竹野の地蔵盆は、井戸の上に安置された地蔵尊を子供たちが祀るところに特色がある（大森恵子稿「但馬地方の地蔵盆と地蔵信仰」『近畿民俗』一一〇号所収　参照）。一方の宇日の地蔵盆では、海から拾って来た石に地蔵の絵を書き、これを地蔵尊として子供たちがそれぞれ祀る姿が見られ、この石地蔵は「化粧地蔵」の一種に分類できる。

〔下村〕地蔵盆には黄粉団子・キュウリ・カボチャ・米・人参などを、「かわせ（柏）」の葉に乗せて地蔵尊に

供える。〔須谷〕地蔵盆には、寺の山門脇に安置された地蔵尊に、「牛飼い」の人々が参った。かれらは車堂の左右に松の枝を立てた。〔和田〕以前は地蔵盆の夜にも、寺の境内で盆踊りを踊った。櫓の上で音頭取りが音頭を口説き、五、六〇人が二重の輪になって踊ったが、年々踊り子が少なくなり輪も一重になった。音頭取りが交代するときは「次の先生に代わります」と歌い、踊り子たちは「エッサッサノコラセ」とか「ソラヤットセーヨイヤナ」と囃した。〔松本〕二十四日の夜に、薬師堂の前庭で盆踊りを踊った。

〔宇日〕二十三日の午後三時ごろになると、子供たちは地蔵堂の前に筵を敷く。海辺から拾って来た楕円形の石にクレヨンで顔を書き、自分の座っている場所の前方部に置く（写170）。この石を「地蔵さん」と呼ぶ。大人たちは地蔵堂に参詣するときに、子供たちが用意した石地蔵の前にお菓子を

写170 宇日の地蔵盆

写171 竹野の地蔵盆
（墓地入口の地蔵）

写173 竹野の地蔵盆
（井戸跡に安置された地蔵尊）

写172 竹野の地蔵盆（井戸の上の地蔵）

写175 竹野の地蔵盆

写174 竹野の地蔵盆
（井戸の上の地蔵尊）

供える。最後に子供たちは供物のお菓子を分配する。〔竹野〕夕方から墓に参り、墓掃除をする。墓地の入り口の地蔵尊にも、花・団子・菓子を供える（写171）。新仏の墓に施餓鬼幡を立てる。

共同井戸の上部には、かならず石の地蔵尊がまつられている（写172 173 174 175）。二十三日に子供たちが地蔵尊に花や団子を供え、その周囲に筵を敷き雑談して過ごす。以前は子供たちが念仏鉦を叩きながら「団子があっても、たまりがないない」といって、町中を巡り賽銭を貰った。集まった賽銭を子供たちの責任において計算し、お菓子や果物と一緒に皆に分配したという。〔切浜〕午後から墓に参り、夜は団子を持って地蔵堂に参詣する。夜に婦人会が中心になって、御詠歌をあげる。この日に初盆の家は地蔵尊にお菓子を供える。子供会と婦人会とが供物を分配する。〔浜須井〕地蔵堂へ子供たちが花・線香・菓子を持って参る。二十三日の夜に、地蔵堂で念仏と御詠歌を唱える。

(8) 万灯

「愛宕火」「万灯」の行事は、火伏せや豊作・無病息災などを願って、愛宕社に火を献じる愛宕信仰を根底に発生した火祭りである。但馬地方の愛宕火に登場する松明の材質は、オガラ・麦藁・藁・割り木の四種である。松明の形態と松明を取り扱う動作に基づいて分類すると、形態のうえでは竹竿型・柱松型・巨火型・ロウソク型・手松明型・手縄型・釣り火型・人形型・藁舟型・文字型の一〇型に分けることができる。動作の上では直立型・火振り型・打ち合い型・火揚げ型の四型に大別できる（大森恵子稿「愛宕信仰と地蔵尊―但馬地方を中心にして―」『近畿民俗』一一七号所収　参照）。この分類にもとづいて竹野地方の愛宕火・万灯行事をまとめたものが、「竹野地方の愛宕火と万灯」一覧表である。

〔銅山〕八月二十四日の午後六時ごろに、村人たちは松明を持って地蔵堂の前に集まり、松明に点火する。堂

表8　竹野町の愛宕火と万灯

	名称	分布地	月日	行事内容・伝承など	材料	数量	形態	動作
1	千灯・万灯	下村	八月二十四日の夜	大正七年ころまで「千灯　万灯」と叫びながら、青年たちが橋の上で火の付いた松明を上下に勢いよく振り、火が燃えるのを競った。この行事が終わると「地蔵さんを送った」といった。	オガラ	一束	竹竿型	火振り型
2	万灯・地蔵さんの送り火	銅山	八月二十四日の夜	戦前までは、最後の松明を一本残して、その灰を持ち帰り、腹痛のときに飲むとすぐ治るといった。本文参照のこと。	オガラ	一二束	竹竿型	火振り型
3	万灯	三原	八月二十三日の夜	地蔵尊に花や団子を供えた後で、松明に火をつけて振り回した。松明の数は多いほど良いとされ、松明を振る時は「まんどうや　まんどうや」と叫んだ。子供や青年たちが、互いの松明を叩き合った。戦前まで分布していた。	オガラ	一二束	竹竿型	火振り型・打ち合い型
4	万灯・お地蔵さんの火	大森	八月二十三日の夜	松明は一軒に一本の割りで作られた。大正時代までは松明を持って氏神の境内まで登り、鳥居の所で燃やした。	オガラ	不明	竹竿型	直立型
5	万灯・愛宕さん送り	門谷	八月十六日の夕方	「万灯をともす」といって、松明を橋の上で燃やす。松明を振り回して豊凶を占う。	オガラ	一二束	竹竿型	火振り型
6	地蔵盆の送り火	御又	八月二十四日の夜	橋の上で松明を振り回しながら燃やす。	オガラ	不明	竹竿型	火振り型
7	万灯・愛宕さんの火	二連原	八月二十四日の夕方	地蔵堂の前で松明に点火し、村の下の堤防まで火のついた松明を持って行き、その場所で燃やす。オガラを一二本束ねて一束にして、これを一二束作り、さらに一二束を竹竿先端に付けて、松明を作った。	オガラ・藁	一二束を一本に付ける。	竹竿型	直立型

	名称	分布地	月日	行事内容・伝承など	材料	数量	形態	動作
8	愛宕さんの火	小城	八月二十四日の夜	本文参照のこと。	こえ松オガラ	一二束	竹竿型	火振り型
9	火振り・愛宕さんの火	森本	八月二十四日の夜	昭和五十六年までは、松明に火をつけて振り回した。火が吹いたように燃えた。	松の割り木・オガラ	一二束	竹竿型	火振り型
10	万灯	市場	八月二十四日の夜	各戸が一本の割りで、松明を持参す。本文参照のこと	松木・オガラ	一二本を一束	竹竿型	火振り型
11	万灯	苗原	八月二十四日の夕方	昭和四十年ころまでは、屋根葺きに使用したオガラをとって置き、地蔵盆にオガラを一二束作って、竹の先に括り付けて松明を作った。現行。	割り木オガラ	一束・一二束	竹竿型	火振り型
12	万灯	坊岡	八月二十四日の夕方	地区の前方の川原に松明を持って行き、松明を川原に刺して燃やす。昭和五十年ころまでは万灯の後で、その年の八月当番の家（愛宕講の宿）に集まり、「お茶飲み会」と称して当番の家が振る舞うお茶とお菓子を食べながら雑談した。	松の割り木・オガラ	一二束を一本に。	竹竿型	直立型
13	愛宕さんのお灯明	林	八月二十四日の夕	本文参照のこと。	オガラ松葉	一二束	竹竿型	直立型
14	愛宕さんの火	下塚	八月二十四日の夕方	松明を川原に面した堤防に立てる。一軒に一本の割りで、松明を用意する。松明の作り方は、若竹を一本切ってきて、一年は十二カ月ということから、竹の小枝を一二本残す。閏年は一三本残す。以前は、三〇センチメートルくらいの松の割り木を一二本（閏年は一三本）を一つに束ねて、若竹の先端に取り付けた。	松の割り木・オガラ	一二本一二束	竹竿型	直立型打ち合い型・火振り型

の前の川辺まで移動し、土中に松明を刺し、竹の中央を持って松明を円形に振り回す。勢いよく松明が燃えた家は、その年は稲が豊作になるとされる。この松明行事を「万灯」とか「地蔵さんの送り火」とも呼ぶ。〔三原〕昭和十九年ごろまでは、八月十七日の夜に「万灯」とか「送り火」とか呼ばれる行事が行なわれた。竹の先端にオガラを一二本束ねてくくり付け、松明を作った。これに火を付けて、振り回した。この日に「神送り」といって、川原に石を積んで花や団子を供えた。二十三日にも盆の万灯と同じものを作った。万灯とは、竹の先にオガラを一二本くくり付けたもので、これに火を付けて振り回した。〔小城〕昭和三十年ごろまでは、愛宕火が分布していた。松明の根本を地面に刺して点火し、松明の根本を三人で持って固定し、ほかの一人が竹の中央部を持ち、円形に松明を振り回した。松明が勢いよく燃えると、その年は豊作であるといった。〔市場〕氏神の灯明から火を移した種火を、さらに一本の松明に点火してそれぞれの松明に火を移してゆく。愛宕講の責任者が中心になって、橋の上で松明に点火し振り回す。勢いよく松明が燃えると、その年は豊作であると信じられた。〔林〕愛宕祭りは八月二十三日から二十四日にかけて行なうものとさ

写176 坊岡の万灯

写177 麻幹で松明を作っているところ（下塚）

れ、「愛宕さんに火をしんじょう」といって、松明を燃やす行事が分布している。これを「万灯」「愛宕さんの火」と呼ぶ。松明の形態は、一二枝を残した竹の先に松の割り木を一、二本とりつけて芯にし、五、六本のオガラを一束にしたものを一二束作り、芯の周囲をとり巻いたものである。毎月、愛宕さんにお灯明をあげるという意味で、一二束のオガラを竹にくくり付けて、松明を作ることになっている。閏年はオガラを一三束付けて、小枝も一三枝残すことになっている。一軒が一本の割りで松明を用意し、夕闇がせまるころになると、道路の川沿いの路肩に松明を立てる。松明がよく燃える年は、豊作であるという。〔下塚〕愛宕火の松明は、竹竿の部分を土中に突き刺し、竹の中間部を両手で持ち、松明を互いに打ち合わせ振り回し、相手の松明が折れるか、あるいは火が消えるまで争ったという。競争をして最後まで残った人は、「今年は縁起がええで、豊作も間違いない」と、村人から祝福の言葉をうけた。〔轟〕以前は八月十四日の夜に、竹の先に肥松をくくり付けた松明を作り、夕方、この松明に火を付けた。この行事を「万灯」と呼んだ。

写178 下塚の松明

(9) その他の八月行事

宮籠もり　竹野では八月十五日から九月一日までの間に、宮の掃除をして宮に籠もった。

観音講　二連原では一月十六日と八月十六日に観音講を行なう。その年の宿の家に観音像の掛軸を掛けて、その前で講員が御詠歌をあげる。以前は一月は餅、八月は団子と決まっていたが、現在で

は茶菓子だけを出すようになった。

観音さんの日　羽入では、八月十七日を「観音さんの日」と呼び、公会堂の前に櫓を組んで盆踊りをする。太鼓・笛・三味線の囃子に合わせて、地区総出で踊る。なお、荆木山の境内を踊り場にして阿金谷・松本・羽入地区が合同で踊ったことがある。

お大師さんの日　八月二十一日を「お大師さんの日」といい、切浜では盆踊りをした。

第五節　秋から冬の行事

(1) 九月行事

はつさく（旧八月朔日）　八月朔日（さくじつ）の略。たのみ（田の実）の節ともいう。今では九月一日に行なっている。稲の穂入りを前にし、無事豊熟をたのむ行事を行なう。また目上の人に贈物をし、たのむ人との結合を願ったというが、前者がもとと思われる。宮中では尾花粥、民間では赤飯を食べる（前出『年中行事典』）。金原では八朔祭といい、げんじょう社に赤飯を供え、またいただく。芦谷では、はつさく参りといい、元伊勢（京都府加佐郡大江町）に参る。いずれも豊作を祈るものと思える。

いも名月（旧八月十五日）附、豆名月　中秋の満月の日、瓜やくだ物を庭に供え、枝豆などを捧げることは、中国において行なわれている。上流社会では、月餅（げっぺい）を供えた。こういう風習の影響をうけてか、日本では、中秋の日を芋名月、旧九月十八日を豆名月（栗名月とも）といい、両名月を行ない、片月見をいむ。鳥

取県伯耆地方では、芋神様祭といい、はじめて芋を掘り取るので、「芋の子誕生」という。この日に限り、誰の畑の芋を取ってもよいという風習も各地にある。月餅にならい、月見団子を供え、尾花を立てる。また九州では綱引が多い（前出『年中行事辞典』）。

竹野町では、一般に「いも名月」といわれている。小いもの御飯を神仏に供え、家族が食べる。切浜では、これに加え、赤ずいきのいもの葉茎も食べる。下村では、同日を豆名月といい、田のあぜで出来た大豆をうでて神さんに供え、食べる。これに対し、若い衆宿があった時代には、「青年ごと」といい、わさめしといい、ずいきいもの御飯をいただき、餅をつきあんころ餅や大根おろし餅を食べ一日中休んだ。春は四月九日で、普通の御飯に餅（あんころ餅）をついて食べた。この行事は、昭和四、五年まであったという。

秋彼岸（秋分の日が中心）　春分に対し、秋の収穫の時期に当たる秋分の日を中心とする。行事内容は、春のと異ならない。

(2)　十月行事

秋の亥の子　旧十月の亥の日の行事で現在は一月おくれの十一月に行なっている。収穫祭で、特に田植えの世話になった家に、餅などを配る。しかし、十一月二十三日の新嘗祭（にいなめさい）の日にこのいの子の行事を行なっている地区もある。同祭は宮中の行事で、古くは十一月第二の卯の日であったが、明治六年から、二十三日に定められた。同日は、兵庫県下でみられる「にじゅうそう」（二十三日のこと）という、地祭の日、また大師講の霜月二十三日とも同じとなり、問題を複雑化する。この項では、亥の子の日だけを記述する。

前記したが、田植えに世話になった家に新米で餅またはおはぎなどをつくり配る。鏡餅一重（下村）、白餅

とよもぎ餅（羽入）、おはぎ（田久日）、また米や大豆を袋に入れ神社に供える（芦谷）などがある。田久日では一一～一三というが、月の数一二がもとかと思う。俗に「やったり取ったり亥の子の餅」という言葉があるほど、盛んにやりとりした。芦谷のように、機械田植えとなってから、これを止めた地区もあるが、現行されているところが多い。ただ日にちが問題となる。芦谷・下村ではこれを十一月二十三日、新嘗祭の日に行なっている。前記したが、同祭は明治六年からのものであり、芦谷の場合、神主が来て新嘗祭の祭事を行なっている。下村でも「亥の子餅」といって配っている。同じ趣旨から同日に明治以降移行したものと思える。下村では、牛を飼っていた時代には、小餅を切って与えたという。

(3)　十一月行事

冬至（旧十一月の中の日）　太陽が冬至線、つまりもっとも南に来、北半球では正午のその位置が一番低く、昼の時間が最短である。陰暦では十一月の中（ちゅう）、太陽暦では十二月二十二、三日となる。中国では太陽の運行の出発点であり、暦の起点とした。世界的にも、太陽の誕生日とする信仰がある。民間でも、この日は恐れつつしみ物忌みする日とされ、唐代でも、赤小豆の粥をたき、疫鬼をはらい、翌日ははなやかな祝日とした。日本にこの行事が移入されるが、特に十一月下弦の日（二十三日）の大師講の行事が生まれた。大子（おおいこ）と呼ぶ神の子が新たな生命力を支えるために、村里を巡り、これにより春が立ち返ると信じられた。この大子が弘法大師や元三大師にすりかえられる。ここに大師講の発生があるが、これは別の行事となり、冬至粥・同南瓜・同こんにゃくを食べる風習が行なわれるようになる。これは、珍しくなった野菜類を冬の祭に供えることから生まれた。冬至以後は南瓜を食べてはいけないともいうようになった。冷酒をのみ、柚湯に入る風習

もあった（前出『年中行事典』）。

竹野町では、全体的に小豆がゆを食べる。切浜ではこれを冬至粥という。かぼちゃをたき神仏に供え、食べるという地区も多いが、普通中風にならないようにという。しかし金原では、かぼちゃを食べることは昔からあったのではなく、秋田の人が鉱山関係の仕事で来ていた時代に持ち込まれたのだという。羽入では、みの柿を家族の数だけとっておき、当日食べる。金原では、神・仏に供える。田久日では、柚を縁の下に入れておくとよいといい、終戦後行なうようになった（同地・根兵三重子氏談）。

霜月二十三日　前項に記したように、冬至に関連し、神の巡回してくる日で、それが弘法大師や元三大師にすりかえられた伝承は多く、大師講が行なわれる。また特に兵庫県では地神祭を「にじゅうそう（二十三のこと）」といい、先祖まつりをする所が多く、但馬でも、播州寄りの地区によくみられる。

竹野町では、これに類する例として、金原で大師のすりこぎかくしの伝承があった。大師に食べさせるために、そばを取って来て食べさせた。大師はその足跡をかくした。それで当日、そば粉で作った餅（きんか餅）を神・仏に供えた。七、八〇年前のことであるという。この大師は弘法大師と思えるが、その主人公が老婆だということは聞かれなかった。田久日では当日、新米のおはぎかよもぎ餅を神仏に供え、家人もいただいたが、新嘗祭のためといっている。因みに同地区では、亥の子餅もしており、これとは別の行事である。

(4)　十二月行事

乙子（おとこ）の朔日（旧十二月一日）　乙子は末子のこと。十二月朔日は最後の朔日なので、こういう。また最後の日なので、祝ったものと思える。鳥取県気高郡では必ずなすを食べる。京都府中郡では漬なすと酒粕・

かりんを食べ、「返す・貸す・借りん」といい、なすは「返す」にあてる。単なる語呂合せであろうか。

竹野町では、おとが朔日、おとの朔日という。小豆飯を食べるが、なすびのみそ漬を食べる。金原では、秋なすは嫁に食べさすな、という。須谷では、みそ漬のなすを包丁にさして食べる。それは、昔行商が訪れて来て犬を殺したので、みそづけを包丁にさして食べさし殺してかたきをとったという（金原・右近政子氏談）。

八日吹き（旧十二月八日）

八日でも特に二月と十二月の日、八日節句・八日送り・八日日・八日待などといい神事を行なう所が多い。御事終いとの見方がある。八日吹きも一連の神事の日と思える。ただこの日は、風が吹いて荒れると信じられている（前出『年中行事事典』『日本国語大辞典』）。やはり忌みこもることから起こった伝承であろうか。三原では当日を八日吹きといい、五目飯をつくり神に供えた。